余白に芽吹くミクロな営み　－都市の裂け目における仮設的構築－

01 都市の裂け目に、即興的な建築を

天王寺動物園と新世界。この二つを隔てるフェンスの周辺には、観光地として整備された空間とは異なる都市の裏のような風景が存在している。高架下の影、荒れた植栽帯、そして廃材を活かして自らの居場所を構築する人。そこでは住民たちが「今あるもので生きる」ための空間構築が行われている。住民によるアップサイクル的な仮設性を新世界周辺のアイデンティティと捉え、この場所に商業・文化・生活が即興的かつ自発的に交わる広場を計画する。

02 敷地

対象敷地は大阪市浪速区と天王寺区の境界部にある阪神高速 14 号高架下。東は天王寺動物園、西は新世界である。天王寺動物園は日本最古の都市型動物園、新世界は通天閣を中心とした歴史ある下町の商業エリアであり、両者とも今でも多くの観光客によって親しまれている。

03 現状とポテンシャル

両者とも同時期に開発され、大阪市を代表する観光地として現代まで人々に親しまれてきたが、阪神高速の高架、動物園のバックヤード、外周フェンスなどによって物理的に分断されている。この場所は都市の「エッジ」であり、多様性や歴史を感じさせると同時に、経済的、社会的な階層の差を浮き彫りにしている。

04 ひとの手で再編成する

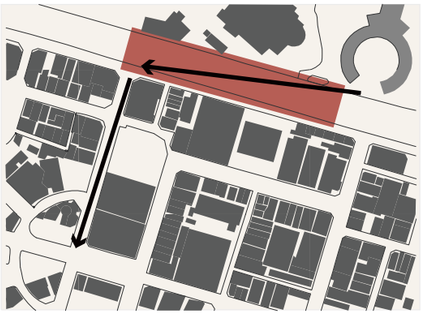
都市構造における最も緊張感のある場所、新世界は動物園側に比べノリやテンポ、人間臭さを感じる。新世界が人々の仮設性によって支えられてきたように、ひとの手で空間を構築し、利用することがこの土地にとって意義のあることなのではないか。

人々が即興的かつ自発的に空間を構成するきっかけとなる建築を提案する。人々は、恒久的な施設である動物園によって運営・管理された様々なインフラを利用し、自由に時を過ごす。

05 最低限のインフラ

最低限のインフラは、恒久的な建築ではなく、人の行為や介入を前提とした「場の骨格」である。機能を限定せず、人々の想像力によって使われ方が変化する「余白」を持つ。動物園から通天閣へリニアな動線を計画し、人々を双方に誘導する。動物園側、新世界側の両方から人々がアクセスし、利用することで空間的・社会的なエッジを解消する。

敷地

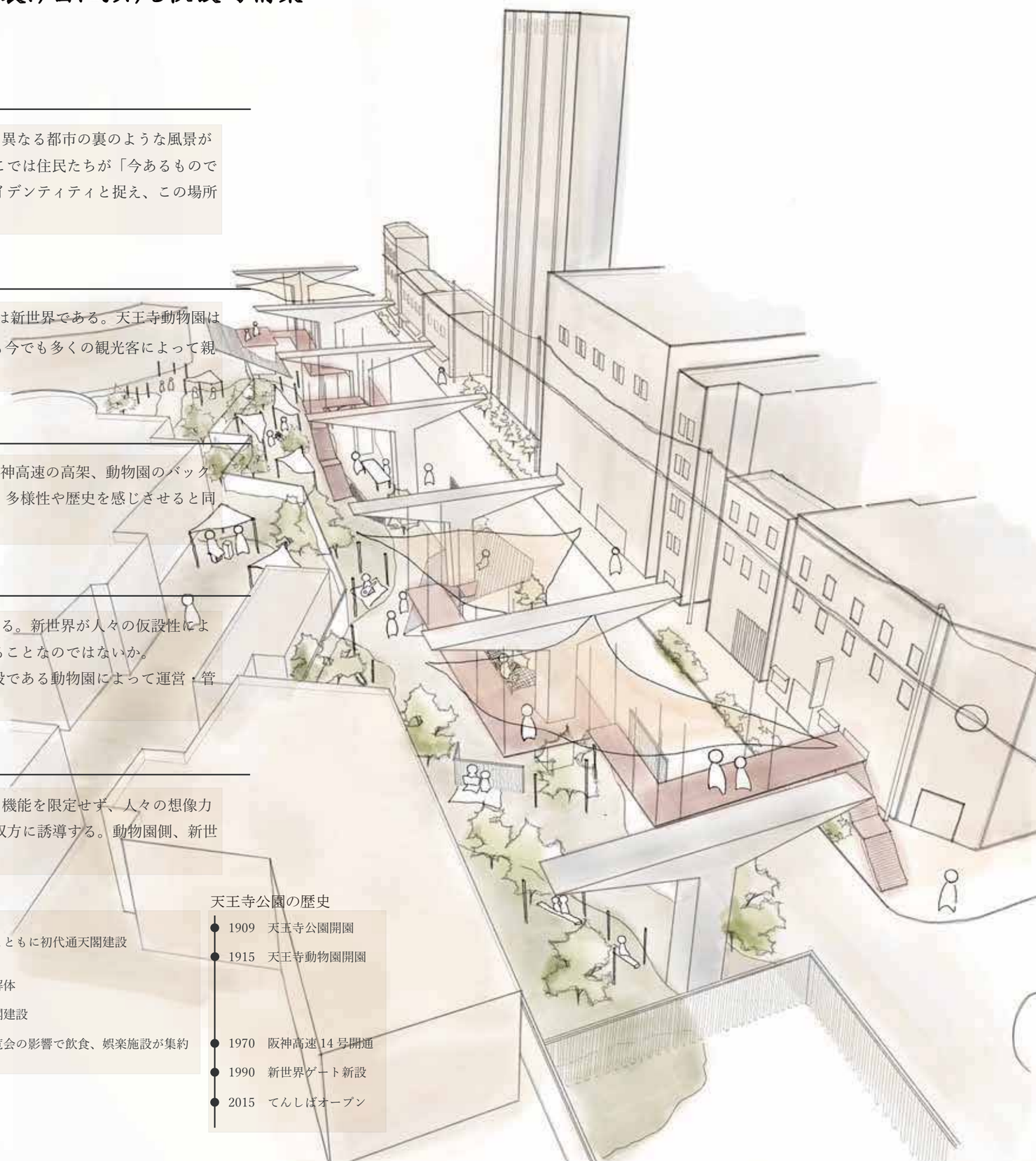


新世界の歴史

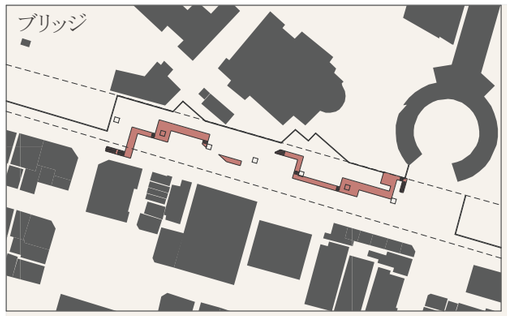
- 1912　ルナパークとともに初代通天閣建設
- 1943　火災により解体
- 1956　二代目通天閣建設
- 1970　日本万国博覧会の影響で飲食、娯楽施設が集約

天王寺公園の歴史

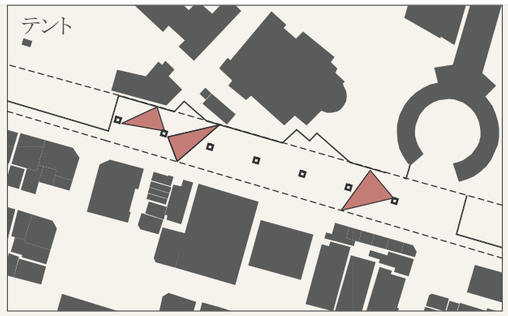
- 1909　天王寺公園開園
- 1915　天王寺動物園開園
- 1970　阪神高速 14 号開通
- 1990　新世界ゲート新設
- 2015　てんしばオープン



06 5種のインフラ



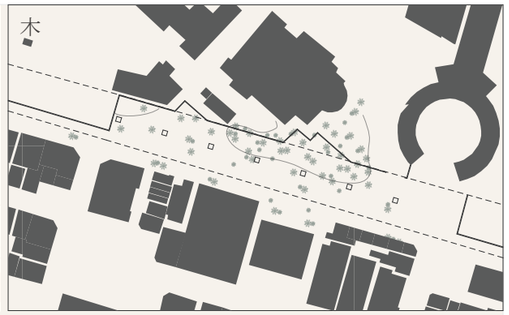
・敷地全体をリニアに動き、車道を越え、動物園と通天閣を繋ぐ
・吊り下げた上部のボリュームが柔らかく領域を区分する
・高さ、通路幅を操作し、場の色を変える



・光、風などの影響を受け、柔らかく領域を区分する
・利用者の仮設的建築の介入のきっかけとして、大きく提示する

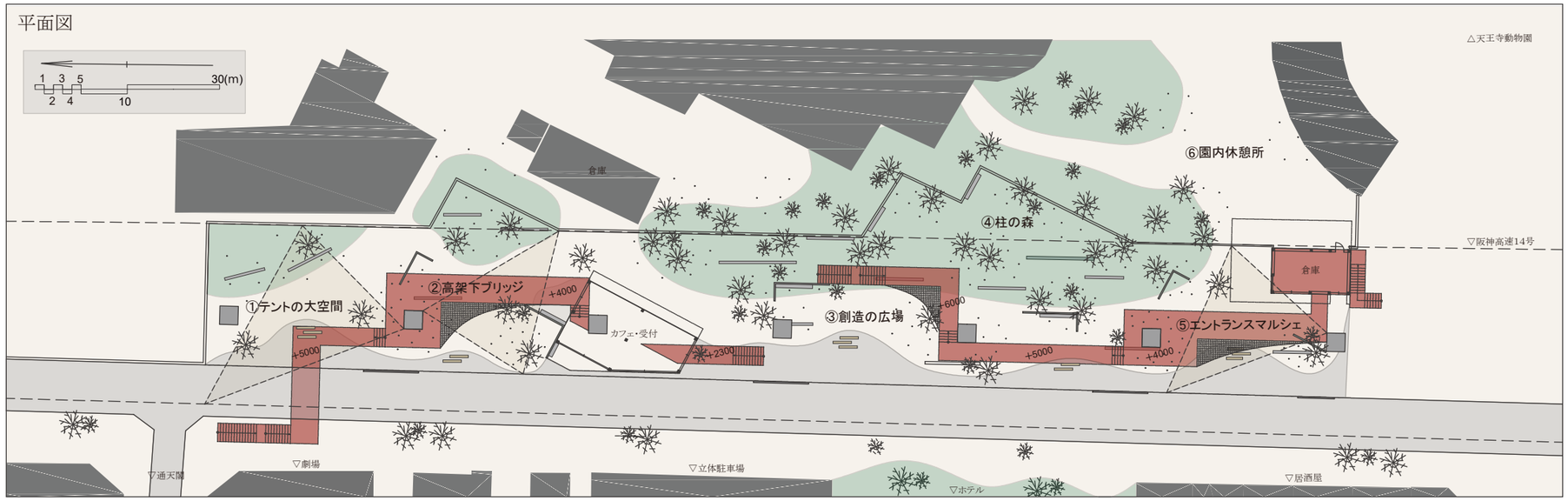
・既存のフェンスを再利用する
・周辺施設からの動線、広がりを考慮し軽く領域を区分する
・場の均一さを無くし、長手方向の動線を遮るように配置、人が滞留する場を作る

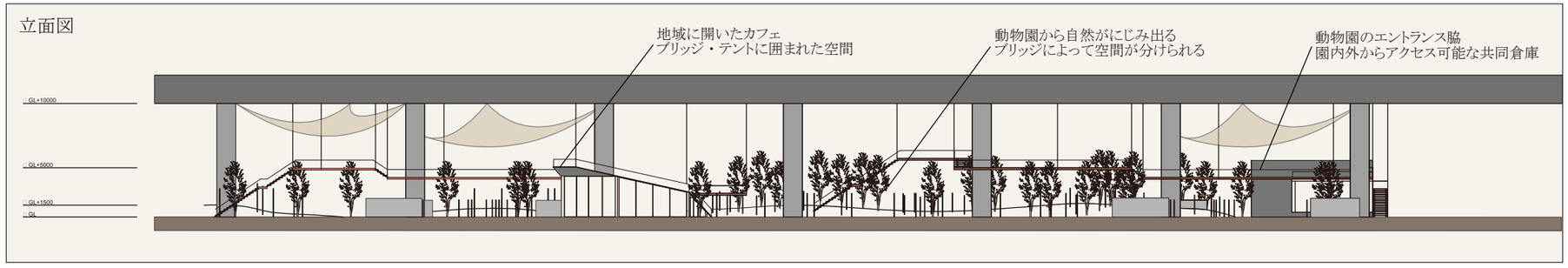
・Φ＝48.6mm の一般的に使用される鉄パイプを使用する
・周辺施設の空間のスケールに合わせ、高さ、密度を設定する
・人々は自然多発的に立ち上がった柱に様々なふるまいを見せる



・天王寺公園、動物園からの植物の広がり

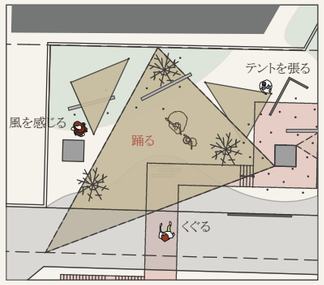
07 計画



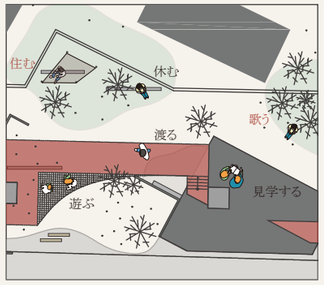


08 ふるまい

①テントの大空間

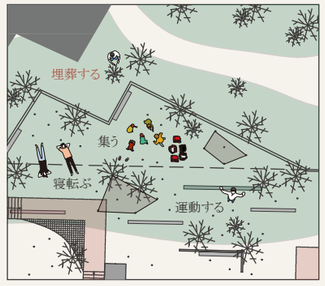


②高架下ブリッジ

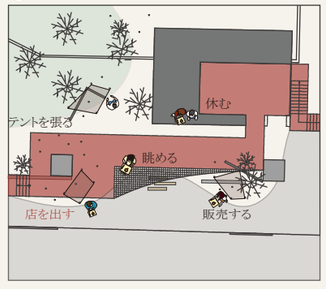


③創造の広場

④柱の森



⑤エントランスマルシェ



⑥園内休憩所

09 動物園による管理・運営

恒久的に存在する動物園により、管理・運営される。人々の自由な活動は、動物園内の休憩スペースや、従業員スペースでも行われる。
時には動物園やその他施設、団体によるイベントなども開催される。